

大本堂落慶法要を執行

天台僧サンガ氏の悲願成就

「インド大乘仏教の総本山」

ナグプール近郊

インド中部ナグプール近郊の町ポニーにある天台山延暦寺で15年間修行し

たサンガラトナ・法天・マナケ氏が任職を務める同寺で8日、「インド大乘仏教の総本山」となる

大本堂の落慶法要が厳修された。10万人もの新仏教徒が参列、インドに仏教が再興しつつあることを印象つけた。

法要は、天台座主名代の森川宏映探題（毘沙門堂門跡前門主）を導師に、叡南覺範（毘沙門堂門跡門主）・濱中光礼（天台宗務総長）・清原恵光（延暦寺執行）・西郊良光（前天台宗務総長）の各氏が出仕して執り行われた。

発願された。鉄筋コンクリート造りで二層の多宝塔形式。収容人数1200人という規模を誇る。

この堂には、インドの地に大乘仏教を再生すると、サンガ氏の悲願が込められている。

さらに昨年、インド仏教界は、アンベードカル改宗50周年という大きな節目を迎えた。インド憲法の父とも呼ばれるアンベードカル博士（1891～1956）は、カー

▲インドの仏教再興を感じさせるように10万人以上が参列

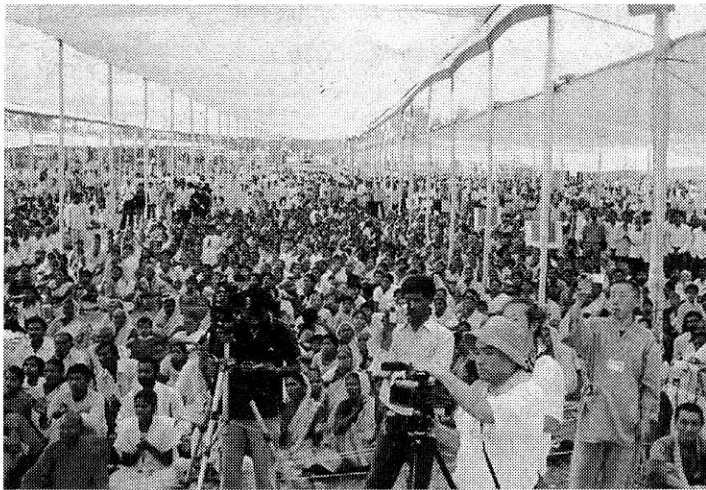
▲サンガ氏の師匠である堀沢祖門氏と叡南覺範氏。後方が大本堂

しかし、今回の落慶まですべてが順調だったわけではない、と話すのは

西郊良光氏だ。「カースト制の維持を望み、仏教への改宗が相次ぐ現状に危機感を抱くヒンズー勢力が、陰に陽に妨害してくる。実際落慶法要の日も、工事関係者に圧力がかけられたこともあり、7割方の完成だった」という。多宝塔形式の大本堂の上層部が建設されるのは、これからだ。

「妨害など」そんなことは気にしないでやっていきますがね」と、西郊氏の表情は明るい。

現在サンガ氏の下では、150人の僧侶が日夜修行に励んでいるという。今後はこの大本堂が、再生インド仏教の新たな聖地になりそうだ。



インドやスリランカ、タイの僧侶による上座部式の法要やチベットの僧侶による法要も営まれるなど、仏陀生誕の国にふさわしい一日となった。

大本堂の建立は、仮本堂落慶20周年にあわせて

週刊 仏教タイムス

2007年2月22日